

子どもが自らの力で人間関係を
形成していく過程について
教師の働きかけによる子ども同士の
関わりの変化に着目して

上越教育大学 学習臨床コース
学習過程臨床分野4年 目黒大樹

1. 研究の背景 ~研究のきっかけ~

出発点

グループ活動において、**グループからあふれてしまう子ども**が存在しているという現状。



子ども同士の間人間関係が影響

1. 研究の背景 ~ 先行研究 ~

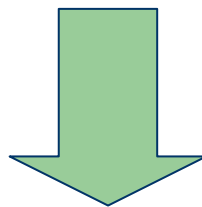
子ども同士の間人間関係について…

・桐生(2001)

異年齢学習形態を用いたグループ学習によって、良好な人間関係を築くことができる。

・小林(2002)

異学年の学び合いは、同学年内の人間関係の改善につながり、その人間関係は学習後も続く。



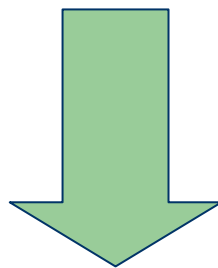
同学年同士のグループ活動において、子どもたちが良い人間関係を形成していく過程については述べられていない。

1. 研究の背景 ~ 先行研究 ~

子ども同士の間人間関係について・・・

・辺土名(2002)

グループ内でつぶやきを拾いあうことがきっかけとなってグループ活動が協働的になるが、つぶやきに対して無視や否定的な応答が行われると、非協働的な活動になる。



子ども同士の関わりによる人間関係の形成については述べられているが、**教師の働きかけによる人間関係の形成**については述べられていない。

1. 研究の背景 ~研究のきっかけ~

目指したい姿

グループ活動において、グループからあふれてしまう子どもが存在しないクラス。

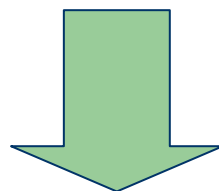
1. 研究の背景 ~研究の目的~

教師が子どもたちに働きかけることによって、子どもたちは自らの力で良い人間関係を形成していくことができる、ということを実証する。

1. 調査と分析 ~調査の目的~

グループ活動において、

- ・あふれてしまっている子どもはグループ内のメンバーたちとどのように関わっているのか？
- ・グループ内のメンバーたちはあふれてしまっている子どもとどのように関わっているのか？



自由なグループ活動において、グループからあふれてしまっている子どもの存在を明らかにする。

2. 調査と分析 ~調査の概要~

< 調査時期 >

2002年12月17日、18日

< 調査対象 >

新潟県内公立A小学校 5年生

< 調査内容と記録方法 >

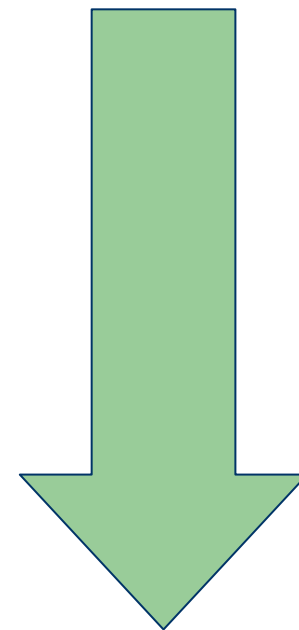
好きな人同士グループになり、給食を一緒に食べる場面をVTRとCTRで記録した。

2. 調査と分析 ~調査の概要~

< 手続き >

普段の給食時間は**既成グループ**

教師が「今日の給食は仲の良い友達と一緒に給食を楽しく食べましょう。」



調査を行った日は**自由グループ**

2. 調査と分析 ~結果~

1. あふれてしまっている子どもは、周りの様子をしきりに窺っている。
2. あふれてしまっている子どもは、グループのメンバーたちに対して働きかけ(行動や言葉がけ)を行っている。
3. グループのメンバーたちは、あふれてしまっている子どもに対して働きかけ(行動や言葉がけ)を行っていない。

2. 調査と分析 ~調査 において注目した子ども~

(A・B・C・Dは同じグループ)

- ・A:かなり元気な子ども。Bに「一緒に遊ぼう。」「一緒に行こう。」と約束を取り付けたがる。教師に注意されることが多い。(あふれてしまっている子ども)
- ・B:友達も多く、みんなから好かれている。C・Dとの結束が強い。休み時間、Aと遊ぶことが多い。
- ・C:リーダー的存在。B・Dとの結束が強い。Aと一緒に遊ぶことはない。
- ・D:リーダー的存在。B・Cとの結束が強い。Aと一緒に遊ぶことはない。

2. 調査と分析 ~ 1に関する分析 ~

1. あふれてしまっている子どもは、周りの様子をしきりに窺っている。

給食時間中において、あふれてしまっている子ども(A)が周りの様子を窺う回数を、グループ内のメンバーたち(B・C・D)と比較した。

2. 調査と分析 ~ 1に関する分析 ~

	周りの様子を窺う回数
A	23
B	6
C	2
D	5

2. 調査と分析 ~ 2・3に関する分析 ~

2. あふれてしまっている子どもは、グループのメンバーたちに対して働きかけ(行動や言葉かけ)を行っている。

・給食時間中において、あふれてしまっている子ども(A)はグループ内のメンバーたち(B・C・D)に対して行動や発話を何回行うか。

2. 調査と分析 ~ 2・3に関する分析 ~

3. グループのメンバーたちは、あふれてしまっている子どもに対して働きかけ(行動や言葉かけ)を行っていない。

・給食時間中において、グループ内のメンバーたち(B・C・D)はあふれてしまっている子ども(A)に対して行動や発話を何回行うか。

・給食時間中において、グループ内のメンバー(B・C・D)同士で行動や会話を何回行うか。

2. 調査と分析 ~ 2・3に関する分析 ~

	行動数	発話(会話)数
A B・C・D	8	1
B・C・D A	1	0
B・C・D同士	48	62

2. 調査と分析 ~調査 のまとめ~

あふれてしまっている子どもが存在する環境は、その子どもの**周りの子どもたちの行動や会話**によって作られている。

2. 調査と分析 ~調査の目的~

あふれてしまっている
子どもが存在する環境



周りの子どもたちの
行動や会話

クラス全体の環境・雰囲気を作っているのは**教師**！

教師が子ども全体に働きかければ、子ども同士の関わりも、よい方向に変わるのでは？



教師が子ども全体へ働きかけた後のグループ活動において、子ども同士の関わりの変化を明らかにする。

2. 調査と分析 ~調査の概要~

< 調査時期 >

2003年10月8日～10月24日

< 調査対象 >

新潟県内公立A小学校 6年生

< 調査内容と記録方法 >

文化祭の準備をするグループ活動(道クイズグループ)、修学旅行(宿泊体験)についてグループで話し合う活動をVTRとCTRで記録した。

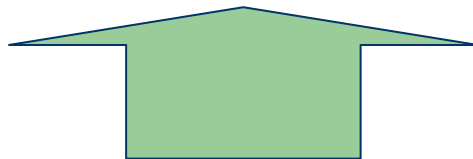
2. 調査と分析 ~調査の概要~

< 手続き 1 >

文化祭の準備をするグループ活動の2時間目の授業の初めに、**教師が、子ども同士の関わりや良い所を具体的に可視化して認め、クラス全体に伝えた。**

2. 調査と分析 ~可視化した内容~

おみくじグループでは、グループのメンバー全員が意見を出し合い、考えて、全員で活動しようとする姿が見受けられ、たいへんすばらしいなと思いました。みなさんも、他のグループの良い所を見習って、グループのメンバー全員が一緒になって協力してやるんだってことを忘れず、準備に取り掛かってください。



ここでは、教師は、道クイズグループ以外の他グループの様子について可視化して認め、クラス全体に伝えた。

2. 調査と分析 ~調査の概要~

< 手続き 2 >

修学旅行(宿泊体験)のグループ編成をする前に、**教師から、子どもたち自身が納得し、共有して、活動できるような目標を提示した。**

2. 調査と分析 ~ 目標を提示した場面 ~

教師：「修学旅行のグループ、どうやって決めようか？」

子ども：「好きな人同士がいい！」

教師：「好きな人同士だと、グループの人数は決まっているから、別々になっちゃうグループも出てくるよ。それに、グループに入れない人も出てくるんじゃない？ グループのメンバー1人でも楽しくない人がいたら嫌だよな？ **みんなが楽しいと思えるような修学旅行にしようよ！**」

子ども：「じゃー、くじ引きで決めよう！」

2. 調査と分析 ~結果~

1. 教師が子ども同士の関わりや良い所を可視化すると、グループ内の子どもたちが、あふれてしまっている子どもの働きかけ(行動や言葉がけ)を拾う。
2. 拾う発話の中に、認める意味合いを持つ発話が行われる。
3. 拾う発話・認める発話がきっかけとなり、あふれてしまっている子どもを含めたグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)が生まれる。

2. 調査と分析 ~結果~

4. 授業中に生まれた交流(関わり合い)は、その後の休み時間には継続しなかった。
5. 教師から、子どもたち自身が納得し、共有して、活動できるような目標を提示することによって、あふれてしまっている子どもを含めたグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)が生まれる。

2. 調査と分析 ~調査 において注目した子ども~

(A・X・Y・グループのメンバー ・ は同じ道クイズグループ)
(AとZは修学旅行の話し合いで同じグループ)

- ・ A: かなり元気な子ども。教師に注意されることが多い。
(* あふれてしまっている子ども)
- ・ X: 友達も多く、みんなから好かれている。Aと一緒に行動することが多い。
- ・ Y: リーダー的存在。真面目で、みんなから信頼されている。
Aとは仲が良くない。
- ・ グループのメンバー ・ : 行動する時はYの近くにいる。
- ・ Z: 女子のリーダー的存在。真面目で、みんなから信頼されている。

2. 調査と分析 ~ 1に関する分析 ~

1. 教師が子ども同士の関わりや良い所を可視化すると、グループ内の子どもたちが、あふれてしまっている子どもの働きかけ(行動や言葉がけ)を拾う。

教師の可視化前・後における、あふれてしまっている子ども(A)の働きかけ(行動や言葉がけ)を拾う発話数の変化を比較した。

2. 調査と分析 ~ 1に関する分析 ~

拾う発話

クイズを考える場面

A: オレの(クイズ)も採用して!

Y: うーん。

A: みんなで10問?

Y: うん。だからあと4問だよ。

相手が言ったこと(聞いたこと)に反応し、
答える発話。

2. 調査と分析 ~ 1に関する分析 ~

発話回数	可視化前	可視化後
Xが拾う	18	23
Yが拾う	1	29
グ が拾う	3	24
グ が拾う	1	18

2. 調査と分析 ~ 2に関する分析 ~

2. 拾う発話の中に、認める意味合いを持つ発話が行われる。

拾う発話の中に、認める意味合いを持つ発話数の変化を比較した。

2. 調査と分析 ~ 2に関する分析 ~

認める発話

クイズを考える場面

A: 次、オレの(クイズ)採用してよ! 3は北海道は?

Y: ははっ! 北海道でいい!

グ : ははっ! これはウケるよ!

相手の意見や提案に共感し、認める発話。

2. 調査と分析 ~ 2に関する分析 ~

発話回数	可視化前	可視化後
Xが認める	2	5
Yが認める	0	6
グ が認める	0	5
グ が認める	0	4

2. 調査と分析 ~ 3に関する分析 ~

3. 拾う発話・認める発話がきっかけとなり、あふれてしまっている子どもを含めたグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)が生まれる。

教師の可視化前・後における、あふれてしまっている子ども(A)とグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)の様子を比較した。

2. 調査と分析 ~ 4に関する分析 ~

4. 授業中に生まれた交流(関わり合い)は、その後の休み時間には継続しなかった。

グループ活動後の休み時間における、あふれてしまっている子ども(A)とグループ内のメンバーたち(X・Y・グループのメンバー)との関わりを示す。

2. 調査と分析 ~ 4に関する分析 ~

チャイムが鳴るとすぐ、
A: Xー！メンコして遊ぼうぜ！
と大声でXに言う。

X: いいよ！

- ・ AはXのところに走って行き、2人でメンコをして遊び始める。
- ・ Yとグループのメンバー 〇 は3人で固まり、アニメの話しを始める。

AとX、Yとグループのメンバー 〇 は、休み時間中、互いに話しかけたり一緒に遊ぶことはなく、交流(関わり合い)することはなかった。

2. 調査と分析 ~ 5に関する分析 ~

5. 教師から、子どもたち自身が納得し、共有して、活動できるような目標を提示することによって、あふれてしまっている子どもを含めたグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)が生まれる。

修学旅行(宿泊体験)についてグループで話し合う活動1時間目における、あふれてしまっている子ども(A)とグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)の様子を示す

2. 調査と分析 ~調査 のまとめ~

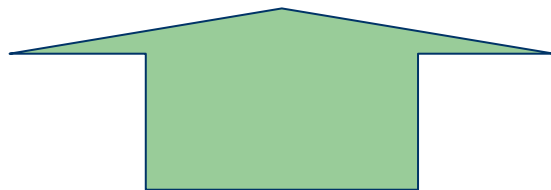
教師が子どもたちに働きかけることがきっかけとなり、あふれてしまっている子どもを含めたグループ内のメンバー同士の交流(関わり合い)が生まれる。

3. 結論

子どもたちは、教師の働きかけをきっかけとして、自らの力で良い人間関係を形成していくことができる。

4. 今後の課題

授業中に生まれた交流(関わり合い)は、その後の休み時間には継続しなかった。



教師による子ども全体への働きかけが1度きりであったため。

教師が子ども全体に働きかけるというきっかけを何度も繰り返し、子ども同士が交流(関わり合い)できる機会を多く持つようにすることが必要！！